柞乃杜

秩父神社社報
柞乃杜（ははそのもり）
第 17 号
平成10年7月20日

土と草

母さん知らぬ草の子を。
なん千萬の草の子を。
土はひとりで育てます。
草があをあを茂ったら
土はかくれてしまふのだ。

金子みすゞ

まつり三題

金子みすゞ全集・I『美しい町』より

まつりの頃

山車の小屋が建ちました、
濱にも、氷屋できました。
お背戸の桃があかくなり、
蓮田の蛙もうれしさう。
試驗もきのふですみました、
うすいリボンも購ひました。
もうお祭がくるばかり、
もうお祭がくるばかり。

まつりの太鼓

青葉に若葉、
若葉のかげを、
赤いかつこ履いて、
かつこ、かつこ、かつこよ。
あさぎのお空、
お空のなかで、
ほら、鳴る、太鼓、
とろんこ、とろんこ、とろんこよ。
白い街道、
競馬の馬は、
よそゆきお衣で、
かつぽ、かつぽ、かつぽよ。

お祭すぎ

お祭すぎの
笛の音、
鉦や太鼓と
はなれては、
なんだかさみしい
笛の音、
紺の夜ぞらに
ひびきます。
紺の夜ぞらの
天の川、
このごろ白く
なりました。

解説　秩父神社(16)

彩の国 名工会々長
坂本才一郎

◆秩父神社社殿 災害復旧工事覚書（5）

社殿の彫刻（二）

秩父神社と左甚五郎

神社の彫刻は、左甚五郎作として著名であるが、多くの参拝者に、左甚五郎といってもピンとこない現状である。

虎の彫刻の中でも子育ての彫刻が人気がある。虎は熱烈な愛情を注いで子育てをするが、特に三匹の子を育てる時は一匹は凶暴であるので、親は目が離せないという。この逸話から彫刻を見ると、親の背にかじりついたり、乳離れができず、親の慈愛を満喫している様子である。

一方、一段高い岩の上には、仁王だちして振りむいて大きな口でほえている。左端の虎は、上をむいて凶暴な一匹は高い岩の上に置いてきたが、あぶなくて見ていられない様子である。

こうしてみると、この一連の彫刻は、よく均整がとれて、各個体の彫刻も彫工の至芸によってよく映えて、左甚五郎作として貫禄充分である。

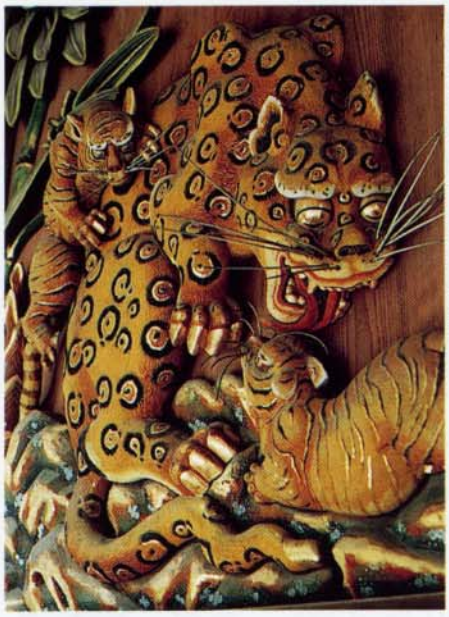
では、左甚五郎とはいつ頃の人か、その経歴について、二・三の文献から調べてみよう。

『日本木彫史』（坂井犀水編）彫刻の名工、左甚五郎は、桃山時代末期から江戸時代初期にかけて、木工頭で京都伏見の住人という、また、京都清水寺に甚五郎七代目と称する、左嘉兵衛の奉納絵馬に、「左甚五郎伏見の人、寛永十一年四月歿歳四十一」とあるが、彫工の甚五郎か否か明らかでないとしている。

『日本木工技術史の研究』（成田寿一郎著）宮彫師として著名な左甚五郎は、彫刻を多用した桃山様式の建築が生み出した、木工像の一つであろう、飛騨の匠で著名な飛騨の甚五郎が左甚五郎に転訛したものとも思える。さらに、大阪府の『近世社寺建築』（大阪府教育委員会）の彫物大工として、江戸幕府の彫物棟梁として、日光東照宮の彫物を担当した、岸上家六代の小三郎義繁は泉州和泉郡和泉の産である。初代は岸上甚五郎義信で、五代目の時、江戸に転居、六代の時、和泉に改姓、公儀彫物師として元和年代の東照宮の造営に彫物大工として従事し、八代和泉忠兵衛は、寛永年代に造替の東照宮拝殿の羽目板に、有名な寄木造りの彫刻を仕上げた、との記事は、岸上家初代を甚五郎と称したことや、彫刻を専業とした家系等から、左甚五郎作の伝承が生まれる素質は充分あったと思われる。

一般に、左甚五郎作と称する彫刻には、刻銘や墨書は一切ない。伝承だけであるが駄作はない。関東では、日光の眠猫の彫刻が左甚五郎作として著名であるが、かつて、東京美術学校教授の竹内久一先生が調査したが、伝承の根拠は発見されず、伝左甚五郎作とした。

秩父神社の彫刻は左甚五郎作としているが、昔からの伝承によるものか、又は根拠があるのか、よく質問されるが、秩父の人達は例年屋台彫刻に接し、彫刻の鑑識については程度が高いので、いいかげんでは承知できないでしょうと返答しているが、その秘密は御本殿側面の神聖な兎の彫刻の裏面にある。それは「兎角（とかく）の杖、亀毛（きもう）の拂子（ほっす）」の墨書きである。拂子は棒の先に長い毛のついた仏具である。兎に角は無く、従って杖はあり得ない。亀に毛は無く、従って拂子は作れない。兎角の杖、亀毛の拂子とは、天下に有りえないものの意で、彫工は天下に無い作品を作りあげたと豪語したわけである。この彫刻師を左甚五郎とよばずして、甚五郎は存在しないであろう。



子宝・子育ての虎

本殿東側の兎

夏祭「川瀬祭」に寄せて

宮司　薗田　稔

一　祭日を差し戻すこと

今年の夏祭は、昔ながらの七月十九、二十日に戻して行なうことになりました。去る平成二年から昨年まで八年のあいだ、おもに地元観光振興の観点から多くの見物客を呼び寄せるためとの強い要望を容れて、祭日を七月二十三、二十四日に繰り延べて執行してきたのですが、期待したほどの成果が挙がらぬうちに、かえって不都合な条件ばかりが目立つようになりました。それに昨年から国民の祝日として七月二十日が新たに「海の日」となったことで、従前の日程に祭日を差し戻すことがこの際もっともご神意に叶うと判断し、関係各位のご理解を得た次第です。

二　反省すべきこと

そもそも祭日の変更は、神社と地元社会にとって重大なことです。なぜなら、わが国では昔から、氏神あっての氏子、氏子あっての氏神という親密な関係から年間の祭事暦と住民の生活暦とが響き合うようにして組み立てられてきたからです。いわば、地域の生活文化をいろどり、その個性を体現する「ふるさと」の顔となるのが、祭日とその祭礼行事なのです。当然のことながら、いつの頃からかの生活の知恵には、誰とも知らず先祖や神々が定め給うたものという子孫たちの謙虚な気持ちが、それを守り通してきたにちがいないのです。ところが現代は、とかく一時（いっとき）の人間の都合だけで百年千年のしきたりを変えてしまうことが多い。特に今の時代は、不変が退歩で、変化が進歩という困った迷信がはびこっている時代です。何でも変えれば良くなるという進歩信仰が、特に日本の伝統文化を脅かしてきたのです。当社も平成二年の当時、時代の要請ということで川瀬神事の祭日変更を受け容れたことは、今からするといささかご神威にもとる短慮かと反省しています。そこで、「過ちを正すにはばかることなかれ」と相成った次第です。

代の川瀬祭」

三　氏子として果たすべきこと

それにしても祭日を正したからには、氏神に仕える神職・氏子としてこの夏祭を実りある神事に仕立てあげねばなりません。なぜなら、鎌倉武士の憲法ともいうべき『貞永式目』が喝破しているように「神ハ人ノ敬ニヨリテ威ヲ増シ、人ハ神ノ徳ニヨリテ運ヲ添フ」からです。要は、従来にも増して伝統の諸行事に多くの若者が奉仕できるように各町内大人連の皆さんのご指導が大切です。幸いなことに、当社の氏子区域にはどの町内にも伝統行事を大切にする意識の高い青年行事がおおぜい揃っているので、宵

宮のお水取り行事などは年を追うごとに盛んになってきています。この川瀬祭は、いうまでもなく本社神輿を荒川の通称「妙見淵」の清流にまで元気な若者たちが舁ぎ込む、勇壮で爽快な神輿洗い神事が中心で、ご祭神の生まれ清まりと悪疫祓いを成就する祈願祭ですが、ともに地元社会が大事にして欲しいのは、宵宮のお水取り行事と本祭の神輿洗いとを介し若者や子どもたちが荒川の清流に親しみ、自然の恵みを尊いものと実感する機会にすることです。

ありがたいことに、市当局や地元観光協会がこの点をご理解くださり、一昨年から宵宮の晩に荒川の河川敷で花火大会を開催することで多くの地元市民や観光客に河の恩恵に触れる機会をふやしていただきました。さらに豊島区や練馬区の子どもたちに、八台の笠鉾・屋台の曳き子を地元の子どもと一緒に体験するよう呼びかけているのも結構なことです。

結び　祝日と祭日

ともあれ、従来の祭日が国の祝日となったことで、幸いに夏祭の良き伝統を正すことができました。あるいは、これもご神慮なのかも知れません。一般論でいえば、最近の国政では国家の祝祭日を単なる祝日とか記念日にしてしまって、国旗を掲げての祝祭というよりは唯の休日にするだけという情けない風潮です。そこで当社では、せめて「海の日」を「水の祭」にして神の恵みを祈る貴重な機会とするなかで、この夏祭で若者と子供たちが主役の山車屋台行事が、やがて来る冬の当社例大祭「秩父夜祭」国指定重要民俗文化財の伝統行事を次代に引き継ぐ主役たちを育成する大切な機会ともなることを祈っているのです。

「昭和40年

【表紙歌解説】

土と草　　金子みすゞ

母さん知らぬ草の子を、
なん千萬の草の子を、
土はひとりで
育てます。
草があをあを茂ったら、
土はかくれて
しまふのに。

今度の表紙と二頁のまつり三題の歌は明治三十六年山口県大津郡仙崎村（現在長門市）に生まれ、大正末期、すぐれた作品を発表し、西條八十に「若き童謡詩人の巨星」とまで称賛されながら、二十六歳の若さで世を去った童謡詩人金子みすゞの作品であります。

素直な気持ちで表現したこの歌は、誰しも子をもつ親の立場の人ならば深く共感するところの歌であり、又、まつり三題も、なつかしいおまつりの情景が、目にうかぶようです。

【表紙解説】

今回の表紙では、埼玉県狭山市に鎮座する広瀬神社の御神木に毎年初夏になると南方より飛来し、営巣するオクッポ（アオバズク）の親子の写真（山崎光隆氏撮影）を掲載させて戴きました。

「帰巣性本能」により、生まれ育った森や木を目指し遥か何万キロも遠く離れた大陸から渡って営巣する様は、まさに、私たちが生まれ育ったふるさとを懐かしく、又、大切にしたいと思う気持ちと変わりありません。

秩父神社の柞の森でも昭和三十五年三月一日に県の天然記念物に指定された「柞の森のブッポウソウ」がおりますが、近年、その姿や鳴声が残念ながら遠退いております。

いつの日か、また我々のふるさとの柞の森にブッポウソウの鳴声が再び響きわたることを望み、自然環境を守って行かなければと感じるところです。

御柱祭

氏子青年会
事業部長　関根太一郎

前回、六年前の諏訪大社御柱祭（山出し祭・木落とし）に続き、今回は、同下社春宮の里曳き祭（建御柱）に参加させて頂きました。

前回に比べ、参加者はバス一台の少数精鋭の三十人で向かい、オリンピックのお蔭によってか道路が大変整備されているのに驚きながら、諏訪に到着しました。

今回は神社側からの参加者はなく、自由行動をとることにしました。

既に街中は祭ムードが漂っている中、曳子の掛け声に合わせ御柱は市街地を曳行されていました。御柱の下の面は、曳行のためか平らになっていて今までの行程のすごさを物語るかのようでした。

木やり唄を合図に動きだしたのを見ると、我々は建御柱の行なわれている春宮へと向かいました。

境内では、三方から太い麻縄を張り滑車を使い、すでに御柱は四十五度位にまで建ちあがっていました。人込みの中三十分位その様子を見ていましたが、いっこうに直立しそうにありません。

木落としが六年間待ち続けた氏子のパワーを一気に爆発させるものであるならば、この建御柱は、また六年待たなくてはならない祭りを楽しみながらも慎重に行なっているようでした。今回、御柱祭を見学し一番感心したのは祭りに携わっている人達の見物人に接する態度でした。私がその人達数人に祭りの質問をしたところ、懇切丁寧に答えていただきました。

そこには、見物人に対してのもてなしの心、そして諏訪の人々が御柱祭に誇りと深い愛着心を持っているのを見せつけられた思いがしました。

祭りに携わっているものの一人として、私もこのように見物人に接するように心掛けようと思いながら、帰りのバスに乗り込んだ……。

秩父神社氏子青年会役員名簿

名誉会長　薗田　稔（宮　司）
顧　　問　大　総　代
今井　奎吾（上宮地）
相　談　役　浅見　武史（禰　宜）
大嶋　英助（本　町）
山中　雅文（上　町）
会　　長　鈴木　建志（宮　側）
副　会　長　今井　祥介（番　場）
大曽根健次（熊　木）
武島　利夫（中　村）
前　会　長　浅賀　克彦（中　町）
幹　事　長　小川　裕司（本　町）
事業部長　関根太一郎（上宮地）
常任幹事
原嶋　修（中　村）
朝川　知一（番　場）
長谷川純司（本　町）
児玉　清則（桜　木）
松田　雅雄（上　町）
山下　剛（本　町）
丸岡庸一郎（東　町）
新井　正治（柳　田）
島田　昭（阿　保）
荒船　俊男（滝の上）
山崎　晃（中宮地）
房野　浩也（熊　木）
新井　理宰（中　町）
久喜　邦康（道　生）
監　　事
新井　康夫（東　町）
中　　忠司（中　町）
会　　計
児玉　定男（金　室）
事務局
正田　裕幸（中　町）
以下神社職員
久下　正司（宮　側）
宮前　勉（番　場）
増田　耕作（宮　側）
浅賀　初男（金　室）
萩原三千尋（上　町）
伊古田　俊（東　町）
岩田　伸一（中　村）
西　富男（永　田）
小澤　弘之（大　畑）
山本　修（上宮地）
高橋　貞夫（下宮地）
茂木　博（熊　木）
原　義政（中　町）
川田　繁雄（野　坂）
大澤　孝（神　社）
枝窪　邦茂（神　社）

退職の御挨拶

前権祢宜　前原利雄

愈夏本番を迎え、秩父恒例の川瀬祭に勇壮な屋台囃子の音と共に秩父っ子達の元気な姿が懐かしく思い出されます。

さて、この度薗田宮司様の特別なお計らいにより三月一日を以て埼玉県神社庁へ転任、併せて地元東松山市鎮座、上野本八幡神社宮司を拝命致しました。在任中には歴代の宮司様始め神社関係者又多くの氏子崇敬者の皆様に一方ならぬご厚情を賜り、数々の貴重な経験と楽しい思い出を積み重ねることが出来、厚く御礼申し上げます。

奉職以来丸二十年、神職としての成人式を迎え、更に新たな気持ちで私なりに精一杯務めて行くつもりです。今後とも宜しくお願い致します。尚余談ですが秩父で食した杓子菜・たらっぺ・手打ちそば、おっ切込うどんそして地酒の味は忘れられません。まさか旨かったです。又ちょくちょく出掛けますのでよろしく。

前主典　塩谷昌子

平成七年より三年間、秩父神社の大神様にお仕えしてまいりましたが、この度、江島神社の神職さんと御縁があり、結婚することとなりました。今まで温かく見守り、支えて下さいました皆様に心から御礼申し上げます。

梟（ふくろう）だより

◆琴勝流雁音会奉納演奏会のこと

五月十三日、本殿前参道において浦和市に本部をおく全国大正琴普及連盟琴勝流雁音会（会長・柴田聖勝氏）による大正琴奉納演奏会が行なわれました。

○らぶりんぐ（朝霞）による
　家路・星影のワルツ
○びいんず（浦和）による
　祇園小唄・瀬戸の花嫁
○おおぷんはーと（浦和）による
　遠くへ行きたい・釜山港へ帰れ
○すいーと10（秩父）による
　出船・酒よ
○カフェテラス111プラス4による
　桜花吹雪・黒田節・上を向いて歩こう・春一番・祝い酒・帰ってこいよ・
　夜桜お七等の曲目が演奏され、当日は真夏を思わせるほどの厳しい日差しでしたが、演奏を楽しむ参拝の人々で、境内は大変な賑わいをみせていました。

◆当社宮司
神社庁々長就任のこと

平成十年四月一日付をもって、当社宮司薗田　稔は、埼玉県神社庁々長に就任致しました。

また、埼玉県神社庁々報室長も平成七年から就任し、その任を継続し各種広報活動に尽力しております。

◆夏越の大祓式

私たちの日常生活のなかで、知らず計らずのうちに、触れ犯す罪穢れを大神様のお力によって祓清め、健康で明るい生活を営むことを祈る神事を「大祓い」と言います。

当社の夏越の大祓は、毎年六月三十日午後三時より斎行され、平成九年度より本殿前参道において除魔信仰による茅の輪くぐりも行なわれるようになり、氏子崇敬者を始め数多くの方々に参列して戴くようになりました。

◆秩父神社妙見講

自　平成十年二月
至　平成十年六月

二月十一日温旧会秩父神社講
　関根巧兀講元外十六名
二月十六日宮側講
　長谷川正雄講元外八十五名
四月二十三日皆野講
　関口ミツ代講元外二百五十六名
五月一日上蒔田講
　前原太郎講元外四十七名
五月十六日原谷講
　岩川福一講元外五百九名
五月十七日近戸講
　市川信雄講元外百八十八名
五月十八日川越柊講
　横山　功講元外二十五名
五月三十一日中宮地講
　高野文吉講元外二百三十九名
六月六日別所講
　石井直幸講元外百四名
六月十四日熊木講
　加藤正二講元外三百二名
六月十七日日野田講
　荒船啓介講元外二百四十六名
六月二十一日下宮地講
　根岸恒太郎講元外九十名
六月二十七日本町講
　大島孝子講元外百十六名
六月二十八日下郷講
　高野明治講元外五百一名

◆職員辞令

宮司　薗田　稔　埼玉県神社廳庁長を命ず
（四月一日付埼玉県神社廳）
権祢宜　前原　利雄　願により職を免ず
主典　塩谷　昌子　願により職を免ず
（二月二十八日付）
出仕　網野　直久　権祢宜を命ず
巫女見習　浅見麻衣子　巫女を命ず
（四月一日付）

■平成殿展示ホール企画

浅見嘉正油絵作品

三月から五月にかけて、崇敬会館「平成殿」二階展示ホールに於いて、二つの個展が開催されました。

その一つは、三月一日より三十一日までの浅見嘉正先生の「浅見嘉正油絵展」、今一つは、四月二十九日から五月二十九日に至る、井上光三郎先生の「いのうえ光三郎野の花スケッチ画展」であります。

これらは、昨年に新築された「平成殿」の展示企画として、郷土の芸術家の作品を広く氏子崇敬者の皆様に御紹介しようとする試みでありました。

特に、浅見先生の個展は、当社の神体山に当たる「武甲山」を中心とした御出展で、当企画の初回を飾るものとして、誠にふさわしいものでありました。

先生は、一水会の度々の優賞や入賞、また日展での特選受賞を始め、数多くの作品展での入賞を果たされ、個展も東京田中八重洲画廊や新宿小田急ほか幾度となく開かれておいでです。現在は、一水会常任委員・日展依嘱・県や県北展の運営委員・秩父美術家協会長などの役員を勤められ、大いに御活躍をされておられます。

また、「いのうえ光三郎野の花スケッチ画展」は、路傍の草花を繊細に描写した作品展で、誠に風雅な趣きでありました。

先生は、故小菅秩嶺先生に書を習われ、更に、故清水武甲先生に写真の手ほどきを受けられるなど、多芸な方で、昭和三十四年からは、郷土の民芸品を制作する「ちちぶ工房」を主宰されております。

その後、芥川賞受賞作家の故鶴田知也氏より、植物画を習得され、現在、市内と伊奈町に於いて植物スケッチ教室を開き、後進の指導に当たられております。

著書に、『秩父の野草Ⅰ・Ⅱ』・『画文集野の花の図譜』・『秩父路花の歳時記』などがあります。

いのうえ光三郎野の花スケッチ作品

◆新人紹介

権祢宜
網野（あみの）直久（なおひさ）(34)
昭和38年8月4日生
埼玉県春日部市出身、國學院大学卒業後、神職資格を得、越谷市鎮座の久伊豆神社権祢宜を経て、奉職。趣味古書収集

去る二月一日より非常勤として、四月一日より正式に権祢宜として、秩父神社の大神様の広前にお仕え申し上げております。

予てより、当地には御縁がございまして、学生時代から、宮司邸敷地内に事務所を置きます、県神社庁の埼玉県神社調査団にも在籍致しております。

この縁りある地のお社に奉職できましたことは、正しく大神様のお導きと心得、当地に骨を埋める覚悟にて、奉仕に励む所存であります。

とは申せ、やはり慣れぬ地のこと、神社内に於いても細部に亘るまで、前任の神社と勝手が異なります。

一から出直す心積りでおりますので、何卒皆様方の御指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

編集後記

■本年より川瀬祭が、十九日・二十日に戻りまた新たな気持ちで、この夏祭りを迎え、ここに社報「柞乃杜」第十七号をお届け致します。

■この度の表紙では、狭山市上広瀬に鎮座する広瀬神社の大ケヤキに、毎年初夏になると大陸から飛来し、営巣するオクッポ（アオバズク）の親子の写真を掲載させて戴きました。しかし、この鳥たちが営巣する大ケヤキも、枝の腐朽がかなり目立ちはじめたことから、地域住民が中心となり樹勢回復治療が行なわれました。

■また、日光の杉並木などでも「このままの状態では、あと五十年の命」と説く大学教授も居り、樹勢回復事業の一貫として、一本一千万円で売却、「オーナー制度」で資産運用し保護を行なっていると聞きます。

■樹勢の衰えは、急激な環境悪化が原因とされ、根本をたどると私たちの豊かさを追求した生活が起因しております。今一度、身の回りの節約を心掛け、日本人本来の生活様式に立ち返りたいものです。

平成十年（一九九八）七月二十日
編集　秩父神社社務所
発行　〒三五五-〇〇〇四　埼玉県秩父市番場町一-一
TEL（〇四九四）二二-〇二六二
FAX（〇四九四）二二-五五九六
印刷所　有限会社　拡文社印刷所
〒三五五-〇〇〇二　秩父市東町二七-八